

乙訓古墳群の調査

令和7年2月22日

井ノ内稲荷塚古墳第8次調査 長岡京跡右京第1307次調査

現地説明会資料

1 発掘調査の目的と概要

- この調査は、国史跡乙訓古墳群の1基である井ノ内稲荷塚古墳の詳細な規模など、その実態を解明する目的で実施しています。また、当地は長岡京跡、井ノ内古墳群、井ノ内遺跡にも含まれています。
- 調査地は、長岡京市井ノ内小西に所在し、発掘調査期間は、令和6（2024）年12月16日から令和7（2025）年3月上旬まで、面積は約50㎡を予定しています。
- 調査は、令和6年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が実施したもので、現地調査は公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが担当しました。

2 井ノ内稲荷塚古墳とは

- 井ノ内稲荷塚古墳は、古墳時代後期の前方後円墳です。平成5（1993）～平成9（1997）に実施された大阪大学の発掘調査によって、古墳の主体部である横穴式石室が発見され大きな話題となりました。乙訓という歴史的に重要な地域にあって、地域首長墓の主体部構造や副葬品を窺い知ることができる大変貴重な事例と言えます。以下に、井ノ内稲荷塚古墳の概要を示します。

規 模 全長約46 m、後円部の直径約29.4 m、前方部長約16.6 m、前方部幅約29.5 m

くびれ部幅約21.5 m、後円部の高さ約4 m、前方部の高さ約3.5 m

主 体 部 横穴式石室（後円部）、組合式木棺直葬（前方部）

横穴式石室：装身具（管玉、銀製耳環）、武器類（鉄刀・鉄剣・鉄鏃・金製刀装具）、武具（胡籥）、馬具（鞍・鐙・轡・雲珠・杏葉・辻金具・革金具・鉸具・金銅装板金具・鉾）、農工具（鉄斧・鉈・刀子・針状鉄製品）、須恵器、土師器

前方部木棺：武器類（短刀・鉄鏃）、装身具（耳環・玉）、須恵器

外表施設 段築未確認、葺石なし、埴輪なし

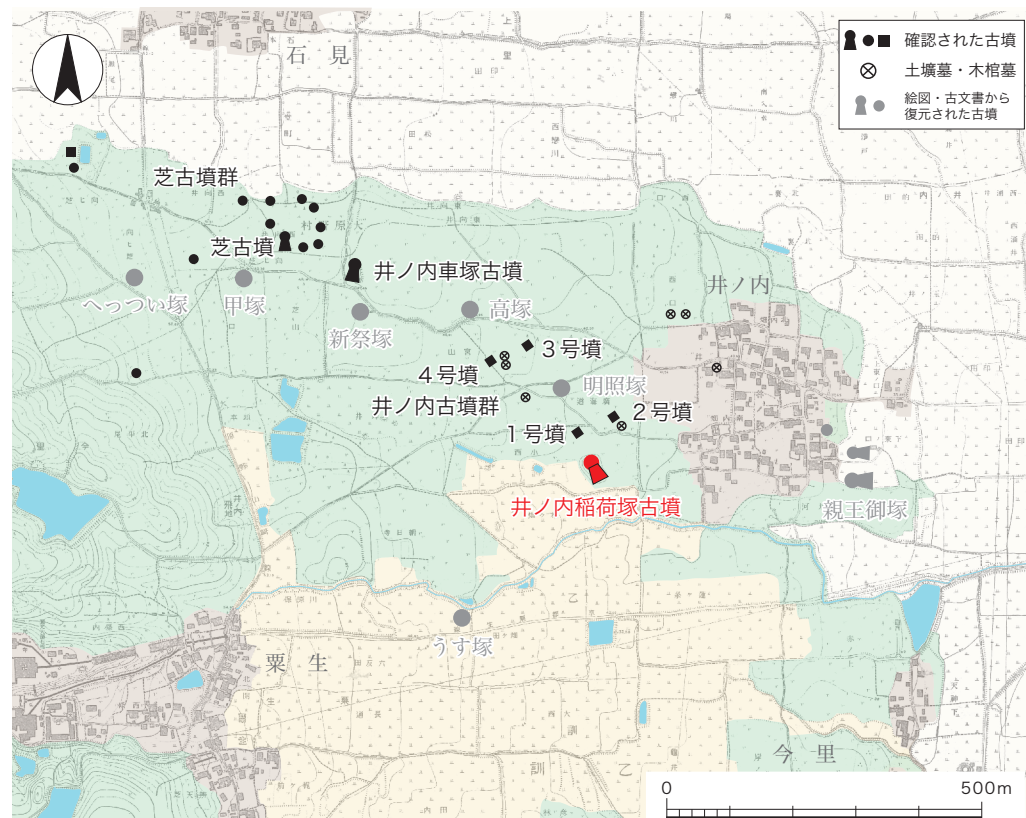


図1 井ノ内稲荷塚古墳と周辺の古墳（1/2000）

時 期	葛 野	向日丘陵	長 岡	大山崎
1 期		五塚原 元稲荷		
2 期	一本松塚	寺戸大塚 北山		
3 期	百々池	妙見山	長法寺南原古墳	境野1
4 期	天皇の杜	伝高島陵	今里車塚古墳	
5 期	鏡山	牛廻り	カラネガ谷2 恵壽山古墳	鳥居前
6 期			宇津久志古墳群	
7 期	下山田板谷 瑞礼塚	南条3		
8 期	下山田下園尾 穀塚		井ノ内 舞塚1 塚本古墳	
9 期	清水塚	物集女車塚	芝(芝1) 井ノ内車塚古墳	
10 期	天鼓森		芝 井ノ内稲荷塚古墳	
終末期	柳原庵寺	宝宮院庵寺	今里大塚 乙訓寺	山崎庵寺

図2 桂川右岸域の主要古墳編年表

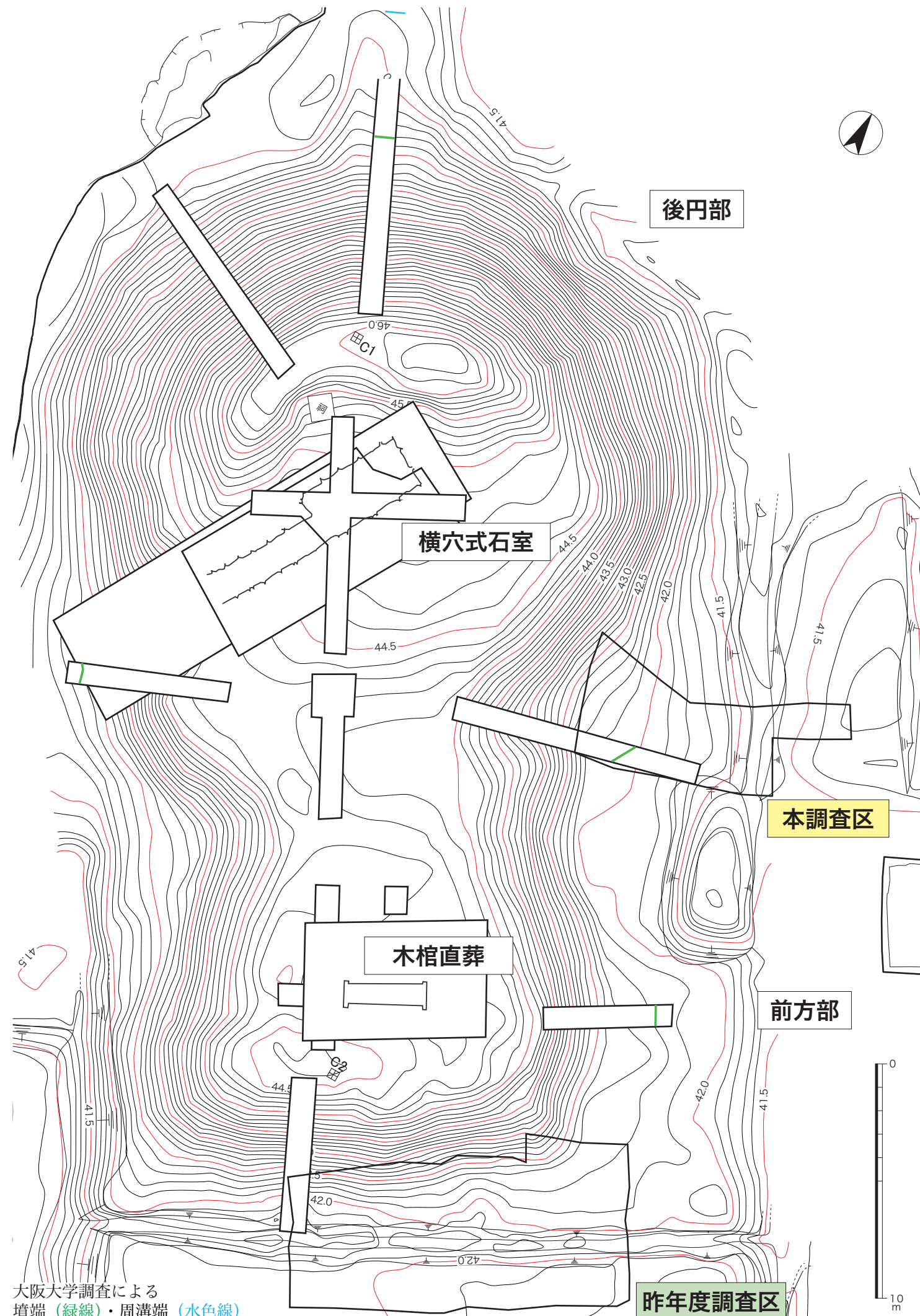


図3 井ノ内稲荷塚古墳の墳丘と調査区（1/200）

3 発掘調査で分かったこと

- ① **後円部東側の周溝を確認しました** 古墳の後円部東側に設けられた周溝を確認しました。本調査区における周溝の規模は、幅約5m、深さ0.8mを測ります。また、周溝の深さは均一でなく、前方部側に比べて後円部側が0.5m程深く掘削されていました。周溝の上層からは長岡京期～中近世の遺物が出土していますが、埴輪は含まれておらず古墳時代の遺物は非常に限られています。
- ② **後円部のクビレ部近くで張り出し（造り出しか）を確認しました** 本調査区を設けたのは、後円部裾の等高線が緩やかになる範囲であり、古墳に伴う何らかの施設が想定されていました。調査の結果、後円部の裾は円弧状とならず、地山が周溝側に1.5m程度掘り残され、張り出しとなることが分かりました。この張り出しが、造り出しといえるものか分かりませんが、横穴式石室開口部との位置関係が井ノ内車塚古墳の造り出しと同じであることは注目されます。
- ③ **張り出し南端から延びる陸橋を確認しました** ②の張り出しの端には、周溝の南東側から延びる陸橋状の高まりが接続しています。この陸橋状の高まりが周溝の外側まで続くのであれば、古墳（張り出し）へ至る通路であった可能性が考えられます。
- ④ **中近世の墳丘利用について** 調査目的の一つであった墳丘盛土に関する情報は、本調査で確認することができませんでした。本調査でも土師器や瓦器、鉄釘、銭貨など中世の遺物が多数出土しており、中世期における活発な土地利用などによって墳丘裾が改変されていることが明らかになりました。

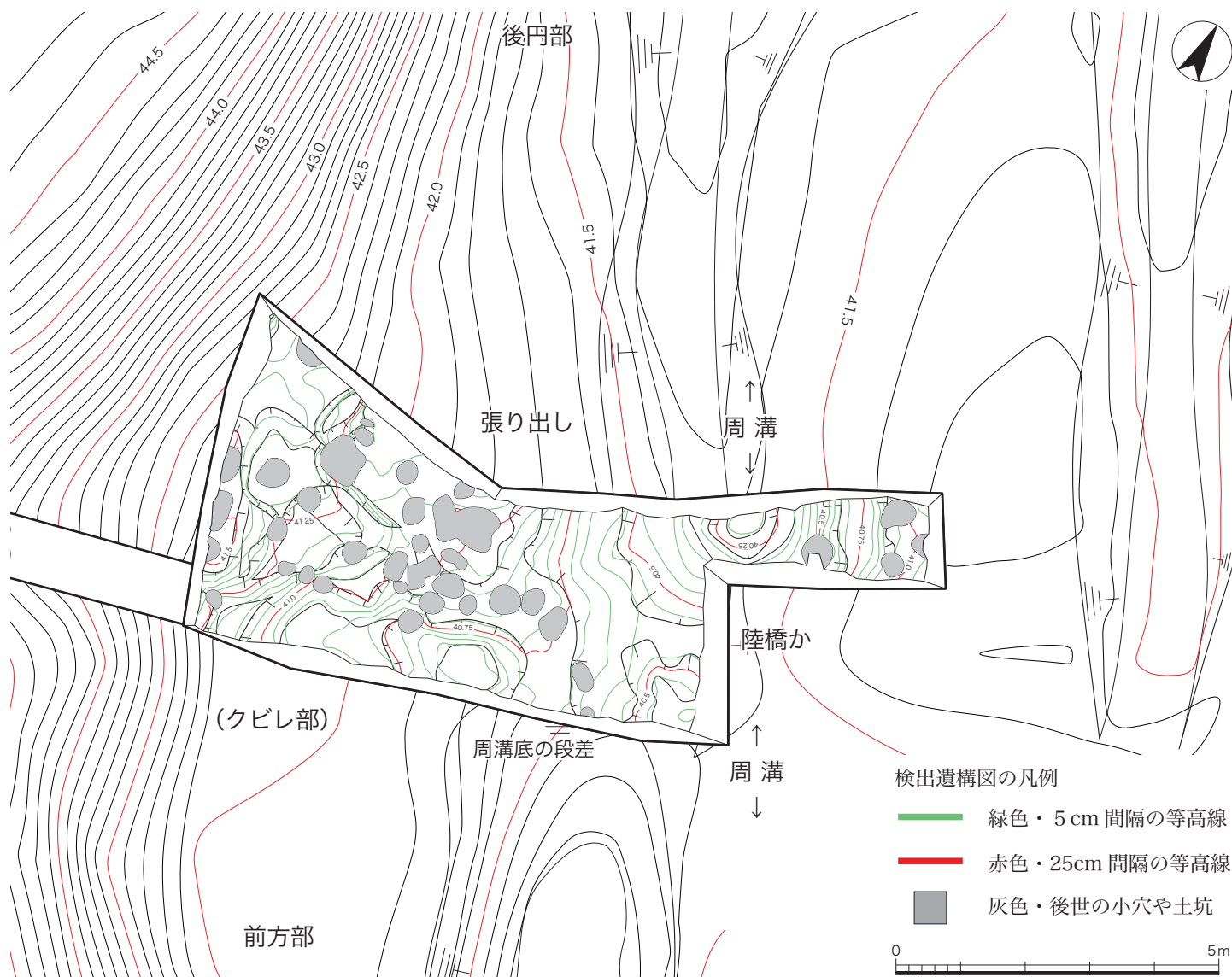


図4 本調査 検出遺構図 (1/100)

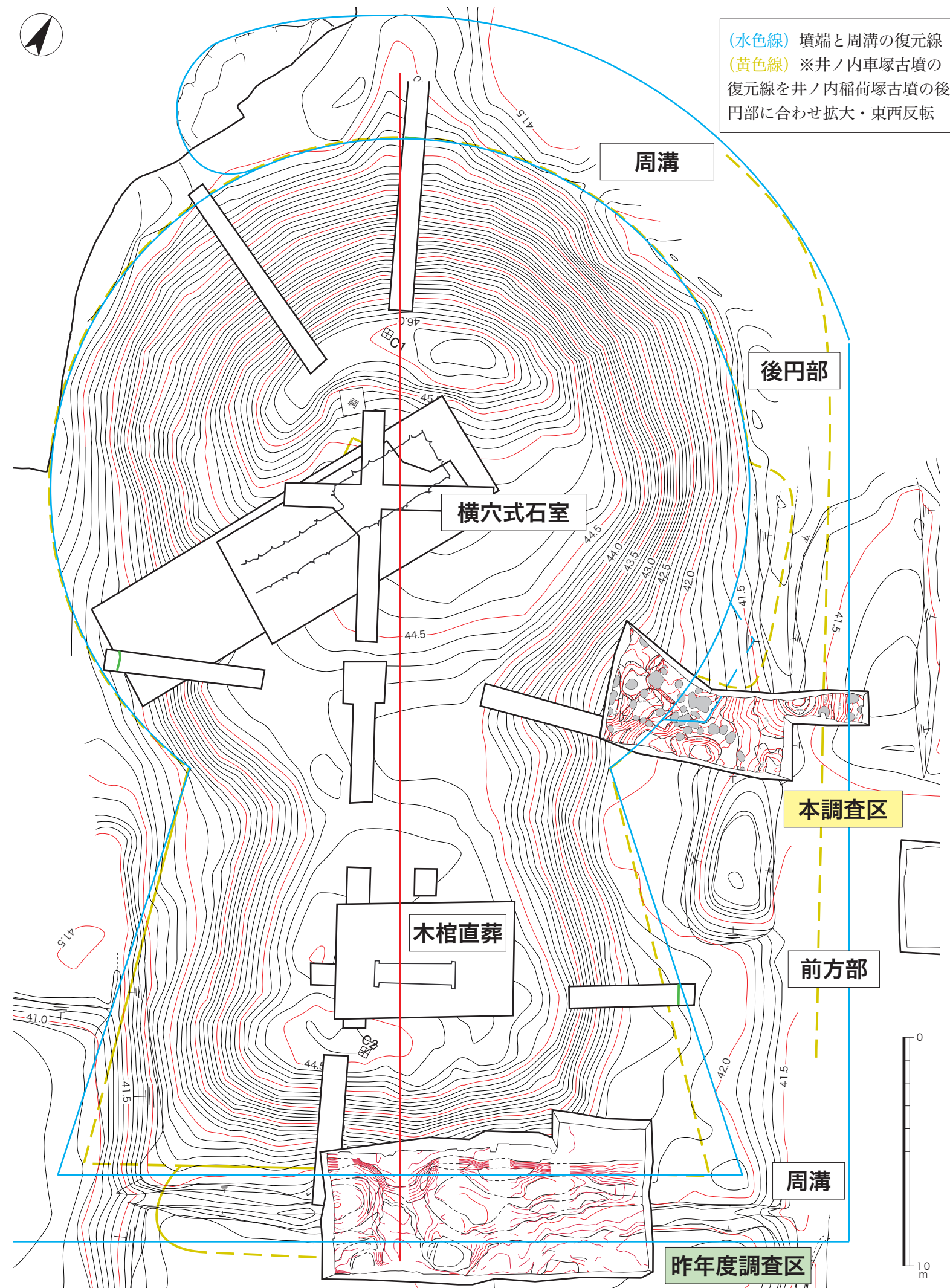


図5 井ノ内稲荷塚古墳の墳丘復元と調査区 (1/200)

(参考) 昨年度の井ノ内稲荷塚古墳第7次調査で分かったこと

① 前方部前面の周溝を確認しました 調査区を貫くように延びる、幅3 m前後の溝を確認しました。溝の底は南東側の地山面より 50cm 程度深くまで掘り下げられていることから、前方後円墳の前方部前面を限る周溝と考えられます。ただ、溝肩の前方部側が急に立ち上がり、溝埋土の上半に中世の土器を含む状況から、古墳築造時の周溝が中世頃に改変されたものと考えられます。周溝の埋土下半からは、数は限られていますが古墳時代の須恵器も出土しています。

大阪大学の発掘調査では、後円部の北側で浅い溝が確認されています。今回、前方部の前面でも溝が確認されたことから、井ノ内稲荷塚古墳は後円部から前方部まで周囲に溝を巡らせる姿が想定できるようになりました。

② 古墳の前方部に繋がる陸橋を確認しました 前述の①のように、前方部前面には古墳と外界を区切るための周溝が設けられています。調査区の西側では周溝が途切れ、前方部に繋がるように地山が掘り残されている状況を確認しました。地山が掘り残された幅は 1.5 m 程度で、この部分が前方部へ向かうための陸橋と考えられます。陸橋の南東側では、両側に長辺 2.5 m 程の四角い穴が設けられていました。

今回①②で確認できた、周溝古墳側の立ち上がり部分や陸橋の古墳側への傾斜起点などを、井ノ内稲荷塚古墳前方部の墳端と見ることができます。

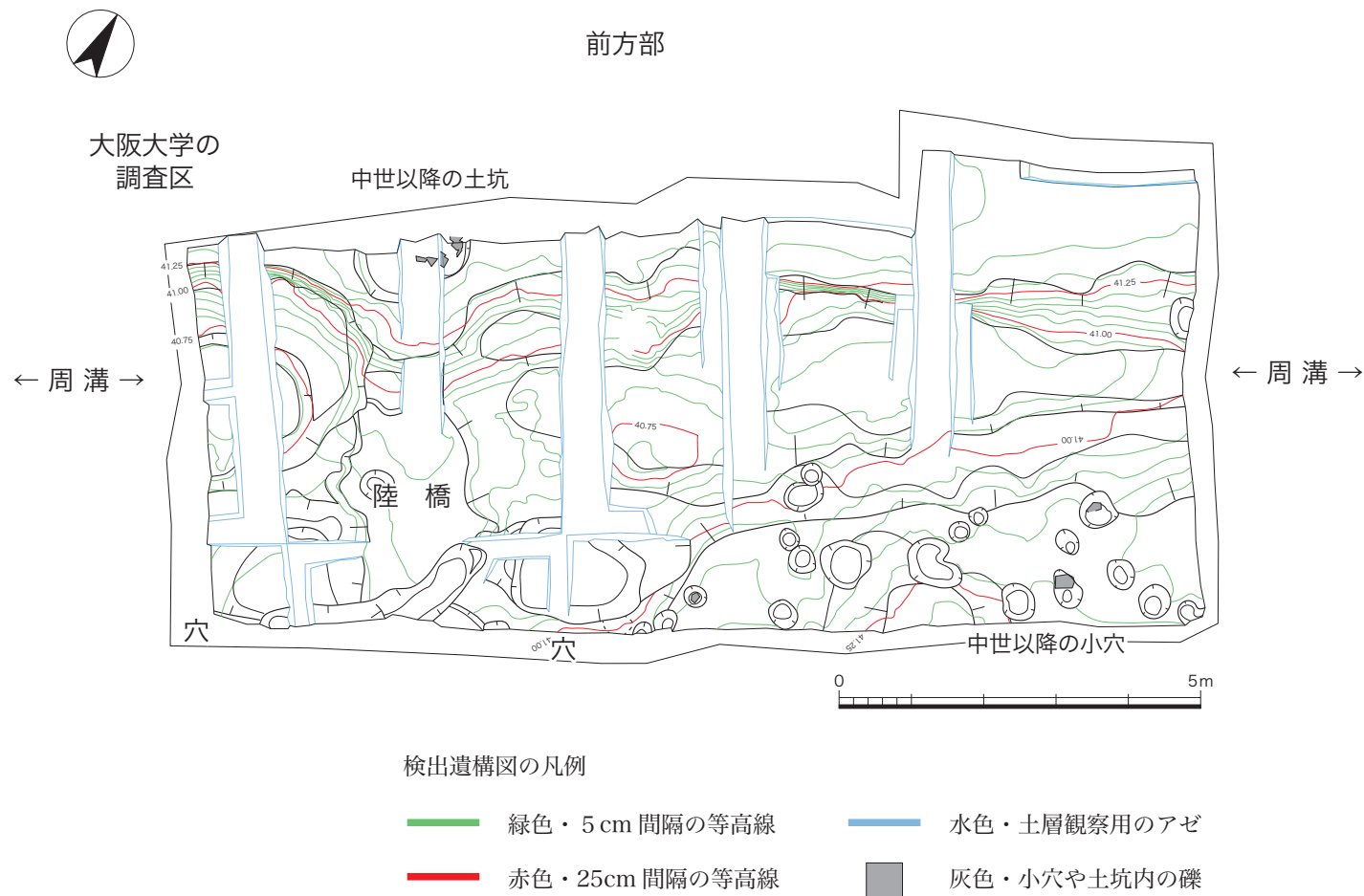


図6 第7次調査 検出遺構図 (1/100)

③ 中世の輸入磁器を埋納した土坑を確認しました 前方部の前面を限る周溝の埋土上半には、土師器や瓦器など中世の土器が含まれていました。調査区の東側では、古墳側の斜面において完形の輸入磁器碗2点を重ねて埋納した土坑を確認しました。2点の輸入磁器はいずれも龍泉窯系の青磁碗であり、内面の界線で区切られた5つの面と底（見込み）に飛雲文などが陰刻されています。また、内面の界線が口縁端部まで延び、口縁部は輪花状を呈しています。土坑埋土からは釘状の鉄製品が数点出土しており、土坑周辺では骨片が出土しています。こうしたことから、この土坑は改葬墓と考えられ、輸入磁器は副葬品として埋納されたものと推定されます。

④ 古墳の前方部南東隅について 調査目的の一つであった前方部南東隅に関する情報については、本調査では確認することができませんでした。前方部前面の南東隅は、さらに調査区外に存在するものと考えられます。ただ、本調査区では、前述の③に加え、墳丘側の黒褐色土に土師器や瓦器が含まれることなど、中世期に活発な土地利用が行われていたことが明らかになりました。



図7 第7次調査 調査区全景前方部前面の状況（南東から）



図8 第7次調査 調査区全景 前方部前面の状況（東から）



図9 第7次調査 陸橋と周溝（南東から）



図10 第7次調査 輸入磁器を埋納した土坑（南東から）